

学会発表

動物心理学会第 72 回大会に参加して

栗原 彬

平成 24 年 5 月 12 日から 13 日の 2 日間において関西学院大学上ヶ原キャンパスにおいて行われた動物心理学会第 72 回大会に参加した。発表題目や内容は以下の通りである。

発表題目：ラットの強制水泳手続きにおける恐怖反応の再発に及ぼす影響

発表者：宮下 遥・栗原 彬・澤 幸祐

要旨：PTSDといった心因性の病気は、治療後に治療環境とは違う環境におかれると症状が再発する場合がある。とくに、PTSDはうつ病を併発しやすく、そのうつ病が治療の効果に対してどのような影響を与えているのかははっきりとはしていない。そこで、本研究では PTSD の症状の再発は恐怖条件づけを用いた復元効果を用いて再現し、またうつ病は強制水泳手続きを用いることで再現した。復元効果は条件づけ、消去、テストの 3 段階で行われることが一般的であるが、条件づけは病気の発症、消去は治療場面、テストは病気が再発するかどうか確かめるものとして想定された。実験には2種類の実験環境を用意し、すべての実験手続きが同一の実験環境で行われる個体と消去時のみ他と異なる実験環境で実験が行われる個体に分けられた。さらにこれらの個体は条件づけ後に強制水泳を経験する個体としない個体に分けられた。その結果、消去時の環境が異なる条件に割り当てられた個体のうち強制水泳を経験しない個体の恐怖反応は強制水泳を経験した個体の恐怖反応よりも程度が強いというものであった。これは、うつ病を併発したほうが治療効果が高いことを意味するが、強制水泳手続きによる健忘も考えられるので、さらなる検討が必要と考えられる。

上記の内容に対して様々な意見や助言をいただき、今後実験を行っていくうえで大変有意義な学会であった。

また、基礎心理学研究第 31 号に論文が掲載された。論文題目と内容は以下の通りである。

栗原彬・澤幸祐 (2012). 道具的条件づけにおける条件性制止訓練と興奮子消去の効果. 基礎心理学研究, 31, 35-41.

要旨：回顧的再評価は古典的条件づけの理論において多くの議論がなされてきたが、道具的条件づけの理論において多くの議論がなされてきたわけではない。特に条件性制止を用いた回顧的

再評価を道具的条件づけにおいて議論することは不安症といった不適応行動を抑制するための臨床応用には欠かせない。条件性制止は罰や恐怖刺激を使用することなく行動を抑制することができるが、回顧的再評価が生じた場合には行動を抑制できなくなってしまうからである。そこで、この回顧的再評価が道具的条件づけにおいても確認されるような現象であるのか条件性制止を取りあげ議論した。道具的条件づけ事態における条件性制止の形成には、単一の弁別刺激が呈示されている時にレバーを押せば食餌性の強化子が与えられるが (ie., A+), 複合刺激が呈示されている際のレバー押し反応は強化されない手続き (ie., AX-) を用いた。その結果、刺激 X は刺激 A と同様の手続きで訓練された刺激 B に対するレバー押し反応を抑制する条件性制止子として機能した。この条件性制止の手続き後、回顧的再評価の手続きである条件性制止子と連合した刺激に対する消去 (ie., A) は、条件性制止子によって引き起こされる反応に影響を与えなかった。もし回顧的再評価が生じているのであれば条件性制止によって引き起こされるレバー押しの抑制はなくなるはずであるがそうはならなかった。これらの結果は、道具的条件づけにおいて回顧的再評価を確認するのは困難であることを示唆し、さらに、不適応行動の抑制に対する条件性制止の有効性を示唆するものである。